

化度寺碑再考

——〈敦煌本〉翻刻説をめぐって——

The Review of Hua Du Si Bei (化度寺碑)

— On the Reprint's Theory of Dun Huang's book (敦煌本) —

要旨

化度寺碑は、唐・貞観五年（六三二）、歐陽詢の書である。原石は宋代に亡佚したため、その全体像は清代まで不明であったが、清の翁方綱が剪装拓本をもとに復元した。

二〇世紀初頭、敦煌莫高窟の藏経洞から剪装された化度寺碑不全本が発見された。前二葉はペリオによってフランスへ、後の一〇葉はスタインによってイギリスへ持ち出され、現在は、パリのフランス国立図書館とロンドンの大英図書館にそれぞれ収蔵されている。敦煌の藏経洞から発見された経緯から、以来「原石による唐拓本間違いなし」と評価されてきた。しかし、王壮弘氏は、敦煌本を考察し具体的な理由を示しながら「実はこれは翻刻本」で、伝世の拓本中では、わずかに四欧堂本だけが原石拓本であると断定した。果たしてそうなのであるか。

二〇一二年八月、ロンドンにある大英図書館、パリにあるフランス国立図書館を訪問し、それぞれの機関に保管されている化度寺碑拓本、もしくはその画像データを実見した。

本論考は、実見したことをもとに、王壮弘氏の敦煌本翻刻説を検証したものである。

横田 恭三

Kyozo Yokota

はじめに

化度寺碑、すなわち「化度寺豈禪師塔銘」は、唐・貞観五年（六三二）、初唐の三大家の一人に数えられた歐陽詢の書である。原石は宋代に亡佚したため、その全体像は清代まで不明であったが、清の翁方綱が剪装拓本から復元し、およそ縦七〇×横八〇cmの石碑であることを突きとめた。

二〇世紀初頭、敦煌莫高窟（千仏洞）の第一七窟（藏経洞）内から貴重な文物が多数発見されたが、その中に剪装された化度寺碑不全本（表裏六枚（二葉））が含まれていた。前二葉はペリオによってフランスへ、後の一〇葉はスタインによってイギリスへ持ち出され、現在は、パリのフランス国立図書館とロンドンの大英図書館にそれぞれ収蔵されている。^①敦煌の藏経洞で発見された経緯から、以来「原石による唐拓本間違いなし」と評価されてきた。しかし、王壮弘氏は、敦煌本を考察し具体的な理由を示しながら「実はこれは翻刻本」で、伝世の拓本中では、わずかに呉県呉氏四欧堂藏本（王孟揚本）だけが原石拓本であると断定した（『書法』^②）。この説は『増補校碑随筆』（二化度寺、一九八五年）にも展開されている。のち、施安昌氏が英仏の両国でこの敦煌本を実見し、「観（化度寺豈禪師舍利塔銘）敦煌本補記」としていくつかの見解を提出した。その後、仲威氏が『書道研究』で、先の王壮弘氏の論を補強する見解を示し、「東方早報」（電子版）にも転載している。^③佐野光一氏は、天来書院「唐代の楷書」シリーズ中の『化度寺碑』に上記三者の論を紹介し、王壮弘氏や仲威氏の論が「ほぼ認められるようになってきた」と述

べている。

二〇一二年八月、ロンドンにある大英図書館（British Library）パリアにあるフランス国立図書館（Bibliothèque nationale de France）を訪問し、それぞれの機関に保管されている化度寺碑拓本、もしくはその画像データを実見した。^④本論では、実見したことをもとに、敦煌本翻刻説を検証してみたい。



図1 敦煌本
（フランス国立図書館蔵）

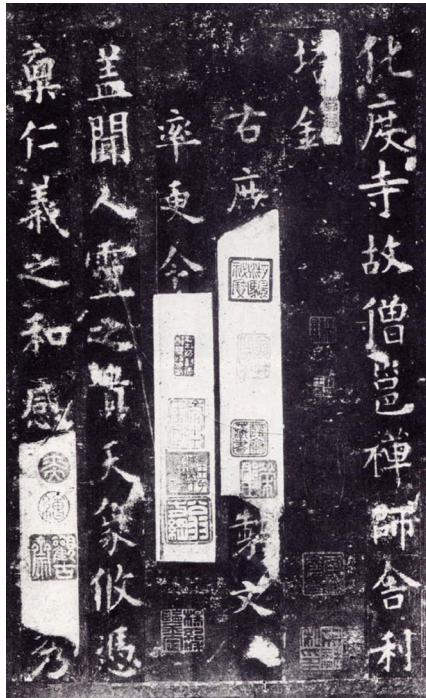


図2 四欧堂本〔王孟揚本〕
（上海図書館蔵）

1. 化度寺碑について

1. 化度寺碑とは

化度寺碑は、正式には〈化度寺故僧邕禪師舍利塔銘〉という。一三歳で親元を離れて仏門に入った三階教の高僧、邕禪師の舍利塔の銘である。唐の貞觀五年（六三二）の刻。李百葉の撰文、歐陽詢の書。楷書三五行、行ごとに三三字を刻している。〈九成宮醴泉銘〉より一年遅い刻になるが、原石は早くに亡佚してしまった。唐・張懷瓘『書斷』（卷中）によれば、歐陽詢は「八体尽能、筆力勁險、篆体尤精。」「風神嚴于智永、潤色寡于虞世南。」といい、その能書を称えて「飛白・隸・行草入妙、大小篆・章草入能。」と記している。⑤ 歐陽詢は若いときは筆勢がやや弱々しかったが、学問を積み体力も備わり、晩年になるにしたがつてさまざまな書体に習熟して境地を得たという。晩年の楷書には〈九成宮醴泉銘〉と〈化度寺碑〉が最も優れているとされる。元の趙孟頫の跋に「唐貞觀間、能書者歐陽率更為最善、而〈邕禪師塔銘〉又其最善者也」とあり、明の王世貞は『弇州山人稿』で「趙子固以歐陽率更〈化度〉〈醴泉〉為楷法第一。雖不敢為然、然是率更碑中第一。而〈化度〉尤精緊、深合体方筆円之妙」と、九成宮醴泉銘と化度寺碑の二碑をとともに称えながら、化度寺碑を九成宮醴泉銘の上において評価している。⑥

〈化度寺碑〉の書は、結体をやや縦長につくり、起筆の打ち込みの角度を工夫して引き締まった印象を与えるが、点画は九成宮醴泉銘より多

少穏やかに見える。この碑は原石が早くに亡佚したため、宋代にはすでに翻刻本が出回った。翻刻は「南瘦北肥」と呼ばれるように肥・瘦の二種の刻本に分けられる。⑦

光緒年間、敦煌莫高窟で発見された〈化度寺碑〉剪装本は、六葉二二頁、毎行四行、行ごとに五字、計二三九（うち三箇所は塗墨され読み得ない）字を存している。「はじめに」で述べたように、前二葉はポール・ペリオ（フランス）、後の一〇葉はオーレル・スタイン（イギリス）がそれぞれ本国へ持ち帰った。中田勇次郎氏は「この残本は、発見当初は、摹刻本ではないかと疑われたこともあるが、敦煌から発見されたという決定的な条件から考えて、どんなに遅くみても宋初を下るものではなく、しかもその古朴な拓法や、完好な欧法の字体からみても、これが唐原石から採った唐拓本であるということは、今日においてもはや疑う余地のないものとされている。」と述べる。⑧ 以降、とりわけ日本では、今日までこの説とほぼ同様な見解が大勢を占めていた。

2. これまでの研究と近年の動向

かつて〈化度寺碑全図〉を作成した清・翁方綱（一七三三〜一八一八）は、この碑の研究に力を注ぎ、化度寺碑研究の第一人者と目された。かれの著述『復初齋文集』などには化度寺碑の跋文が多数記されており、精緻な考証をもつて研究していたことが知られる。⑨

『翁方綱題跋手札集録』に載せる翁方綱の題跋「跋化度寺碑」は二二種にのぼる。ちなみに「礼器碑」「夏承碑」はともに三種、「曹全碑」は

五種、「孔子廟堂碑」は九種だが、「九成宮醴泉銘」にいたっては二四種の題跋がある。⁽¹⁰⁾これによって「九成宮醴泉銘」に匹敵するほどの数量をもって「化度寺碑」を考証していたことがわかる。一つには考証する必然性があったからとも考えられる。第一に、九成宮醴泉銘と拮抗するほどの名碑であったことは当然であるが、第二として、原石が早くに失われたにもかかわらず、宋代以降多くの翻刻本が出回り、それぞれ異同があったため、自ずと研究する意味が深まったものと思われる。同じく翁方綱の『蘇齋唐碑選』に「第一化度、第二廟堂、第三醴泉銘」とし、「以上三種は実に右軍の嫡乳、晋法の今に存するもの」と論じている。また王澐が「化度は醴泉に勝る」説は、篤論ではないと言ったことに反駁し、「化度勝醴泉論」二編を打ち出し、善本拓を手になかったことによる王澐の誤解であるといつて退けたのであった。⁽¹¹⁾

しかし、本論で述べるように、二〇世紀初頭に敦煌の藏経洞から化度寺碑拓が発見されたことにより、翁方綱が原石拓としたものが、当時の学者から宋翻刻本であると断定された。ここにおいて翁方綱の化度優劣論は論拠を失い、今ではやや色あせた感があるが、「化度寺碑全図」を作成した功績は評価されなければならない。この経緯を中田勇次郎氏は『書品』四〇号で詳細に考証し、かつ『中田勇次郎著作集』に「化度寺塔銘の諸本」として以下の諸本を載せている。⁽¹²⁾

- 唐の原石本
 1 敦煌所出残本 2 王孟揚本 3 陳原廉本 4 吳門繆氏本
 宋翻本

- 第一種：1 玉泓館本 2 楊守敬本 3 翁覃溪本 4 朱笥河本 5 蔣春
 皐本 6 陸謹庭本 7 鮑氏本
 第二種：日本伝本（元代に日本にもたらされ、清末に再び中国へ戻ったもの）
 第三種：清内府本

各種混装本
 明清翻本

- 1 墨池堂帖本 2 横石本 3 直石本 4 薛衝本 5 海山仙館摹刻本
 日本刻本

- 翁覃溪手摹化度寺碑底本 全唐文 化度寺碑考 八瓊室金石補正
 統高僧伝卷二十三僧邕伝

中田勇次郎氏の見解は、以後、日本国内の主な書道関係のテキストに踏襲されてきた。一例を挙げてみよう。比田井南谷氏は

「今世紀のはじめに敦煌の千仏洞から、スタインおよびペリオが唐拓に間違いない原拓の残片を別々に発見した。これはそれぞれロンドンの大英博物館（現在は大英図書館）とパリの国立図書館に保存されている。これを見ると非常に精彩があり、疑う余地のないものである点から考えて、文字の形や泐損字の状態に差のある前記の諸本は、同一のものではないと考えるべきである。また、これらとは別に原石本と推定される「王孟揚本」などもあるが、摩滅がはなはだしく、鑑賞にたえない。わたくしは昭和四十年にロンドンで敦煌本の拓本を見たが、昔の所蔵者が墨を塗って工作をしたあとが、墨

色の違いと塗った墨にカビが生えているので歴然とわかった。大部分の字は字画のきわまで墨を塗っており、そのため本来の筆勢がうしなわれているのが惜しまれる。」

と敦煌本に塗墨がなされてしまったことを惜しみつつも、敦煌本を原石唐拓として高く評価している。¹³⁾

ところが、「はじめに」で触れたように、一九八四年、王壮弘氏は「敦煌本翻刻説」を提出し、伝世の拓本では四欧堂蔵本（王孟揚本）だけが原石拓本であると断定した。のち、施安昌氏が英仏の両国でこの敦煌本を見し、「観（化度寺邕禪師舍利塔銘）敦煌本補記」を提出し、さらに仲威氏が先の王壮弘の論を補強する見解を示している。

それぞれの骨子を以下で紹介する。

(1) 王壮弘氏の見解

六本の拓本中、王壮弘氏は、翁方綱の考えとは正反対になるが、四欧堂本だけが原石拓でそのほかはすべて翻刻であると結論付けた。その理由として、①四欧堂本は精気があるが、ほかはみな字画が硬い②四欧堂本は石の渤損箇所が自然であるが、ほかはみな石花の箇所が人工的である。③四欧堂本は、シミが喰ったような箇所でもいくらか元の姿を窺えるが、ほかはみな字画がまったくつきりしない。また、三行目「粟」「属」字は、四欧堂本以外はすべて筆面を誤刻しているといい、さらに五行目「之」、七行目「化度寺」「俗」「氏」、一〇行目「宗」の字姿や石渤痕の違いを具体的に指摘している（比

較表 1 参照）。

(2) 施安昌氏の見解

施氏は実見した際の墨の状態や押印されている印章などを詳しく観察したあと、冊子の順序に錯簡があることを指摘している。また「父□陵太守」の□字に関して、翁方綱や孫星衍、何紹基らの題跋では「博陵太守」とみているが、王昶は翻刻の誤りではないかと疑っていた。施氏は、もし「博」字ならば敦煌本のこの部分に避諱（ここでは塗墨）する必要がないとし、長らく疑問に思っていたが、直接考察した結果、左側上部の三点の筆画、つまり「號（號）」字の起筆部分であることを確認できたという。

(3) 仲威氏の見解（「東方早報」電子版）

敦煌本と四欧堂本を比較研究してきたこれまでの経緯を記している。かなり長文になるが、翻訳してその大意を以下に掲載する。羅振玉は敦煌本の出現によって、これまで翁方綱が「唐原石宋拓真本」としてきた五種の拓本はすべて翻刻であるとして、翁方綱《化度寺》版本の考証の誤りを正した。しかし、羅振玉は四欧堂本に対してどのように評価したかという点、一九二六年の羅振玉自身の跋に「（四欧堂本）をはじめて開いたところ、神采煥發、一々敦煌本と比較する必要はなく、すでに確固たる唐石宋拓である。」と断定したことが記されている。つまり、精密な考証をせずに判断しているこ

とがここから窺える。

陳巨来『安持精舎人物瑣憶』にある呉湖帆の文章中に、羅振玉が呉湖帆のために四欧堂本に題跋し揮毫料として二〇〇元を得たということを記しているが、あるいは二つの拓に相違があることを知っているながら、それを指摘することに忍びなかっただけではないかと思われる。

四欧堂主人である呉湖帆は羅振玉の高い評価を得て大いに喜び、『四欧堂本化度寺』として出版し、友人に配った。しばらくして呉湖帆は「敦煌本の影印本」を手に入れたものの、そこでまた新たな問題が浮上したのである。呉湖帆はこの二冊を比較してみたところ、四欧堂本は首行第一字目「化」の「匕」部、撇画「ノ」が突き抜けているのに、敦煌本は突き抜けていないことを発見した。この箇所は二種の拓本中もつと顕著な違いである。ところが今日、四欧堂本「化」字を観察してみると、敦煌本と同じように撇画「ノ」は突き抜けていない、「化」字の「ノ」の末筆部分は明らかに誰かに塗りつぶされたのだが、塗りつぶした人はほかでもない呉湖帆本人であった。その目的は二種の拓本をより似せるためである。呉湖帆は当時すでに四欧堂本と敦煌本との違いを知ってしまったため、敦煌本の権威に恐れをなし、自蔵の「四欧堂本」の「化」字「ノ」の末筆部分を塗って、他人を欺き自らをも欺いただけでなく、久しからずして化けの皮が剥かれることを恐れ、冊中の傍注に「化度二字経前人描過、較唐拓残字有失、戊辰（一九二八）元旦」と記した。

〈四欧堂本〉は一九一五年、潘静淑が呉家に嫁入りとともにもたらされたもので、呉湖帆の世代になって〈四欧堂本〉が影印され、さらに戊辰（一九二八）元旦にいたったもので、その間所蔵者はかわらない。つまりここにいう「前人」とは呉湖帆本人なのである。歴代の碑帖中には、偽物を本物の様式に照らして塗り改めたものはあるが、このように偽物を参照して本物を塗り改めた例はこれまでにない。

現在、手元にある複数の四欧堂本（王孟揚本）には「化」の「ノ」部の塗墨を確認できるものはなく、上海図書館蔵の原本を見していないため、上述の論を検証できていない。この件に関しては、今後、実現する機会を得てからもう一度組上にのせたい。

二. 敦煌本の現状について

二〇一二年八月、ロンドンにある大英図書館、パリにあるフランス国立図書館を訪問し、それぞれの機関に保管されている化度寺碑拓本、あるいはその画像データを見つけた。以下にその詳細を述べる。

1. フランス国立図書館蔵拓

サイズ：縦二二×横八・七cm（右側三mmほどの台紙部分を含む）、一枚のみ、表裏に拓紙が貼り込まれているため、計二頁、三九字になる。な

お、左辺上下の角は丸くカットされている。

第1枚目

表：「化度寺々率更令」一九字

左最上部の欄外に青インク（ボールペンか？）で「4510」の数字が書き込まれている。この数字はペリオドキュメントの整理番号である。ただし、印刷された図版に必ず付されている右最上部の「Palliot chinnois4510」の貼り紙はみられない。五字ずつ剪装され、ハガキより一回り小さいサイズの台紙に表裏に張り込まれてある。ちなみにほとんど全ての文字に塗墨が施されている。例えば、「化度」は点画のいろいろな部分に塗墨が施された結果、シャープな輪郭が生まれた一方、拓本を採取した当時の字姿が失われている。

裏：「蓋聞人々窮理尽」二〇字

剪装した拓紙の四周に黒無地の拓紙を巡らし貼り込んでいる。これは敦煌で発見された一二葉すべてに施されているため、剪装本に仕立てたときのものである。また表と同様、文字の輪郭に塗墨が施されている。

2. 大英図書館蔵拓

化度寺碑拓本は、ブルーの紙製ケース内に、一〇種類の敦煌の写経などの紙資料とともに入れられていた。写経類はさらに透明なビニル製ケース内に入れられ、化度寺碑拓のみ紙製の折りたたみケースに収められ

ていた。

サイズ：縦二二・二×横八・八cm、全部で五枚、表裏に拓紙が貼り込まれているため、計一〇頁、二〇〇字（塗墨で文字が見えない三字を含む）になる。

図で示したように、右端部分を糊付けし冊状に仕立ててある。ただし、五枚の順序に錯簡が生じている。第五枚目におかれた表裏の拓本は本来、ロンドンにある敦煌本五枚中の先頭に来るべきものである。糊付けがいつ頃なされたのかは不明であるが、仮に発見当時のままであるとしたら、蔵経洞に収納されるころにはすでに順序が前後していたことになる。これに関して施安昌氏は「当初、蔵経洞中の化度寺碑拓はすでに前二頁と後の一〇頁もバラバラになっていたのではないかと推測し、第一二頁以下の部分も、他の文書などに挟まれて外部へ流出したか、あるいはもともと蔵経洞内に入れられなかった可能性もあると述べている。

拓本の墨色は松煙墨による沈着した深みのある黒であるが、細部まで観察すると、文字の輪郭や石花の部分に後から墨を入れた痕跡が窺える。台紙は淡い黄色味がかつた繊維質の強い紙である。また拓本に使われている紙はきめの細かい上質なもので、比較的毛足の長い繊維が表面に付着しているのが確認された。

ハガキより一回り小さいポケットサイズ、表裏に貼り込んだ仕立て方、右端部分を糊付けして冊状にしているなどの点から、この化度寺碑拓は

つねに携帯することを意識して作成されたものと考えられるが、だとすれば、袖珍本の類になる。「三階教の高僧である巽禪師の舍利塔銘」という内容から、当初、仏教徒もしくは信心深い人物が携帯していたものかもしれない。

第1枚目（錯簡があるが、そのままの順序で示す）

表：「論浪霞く生之変」二〇字

右下隅に「S.5791」と手書きで整理番号が書かれてある。「論」のゴンベンや「浪」の「良」の周辺などを始めとして多数の部分に塗墨の痕が見られる。

裏：「大慈廣く以立唯」二〇字

「大」の右払い、「極」の「又」部の右払いに塗墨の痕が見られる。形を整えようとしたものであろうが、文字そのものが縮んだ印象を受ける。

第2枚目

表：「真如之く照靈心」二〇字

右端にペンによる「ch00123」「ch1080」の書き入れがあるが、この番号は整理番号だと思われるが、詳細は不明である。なお、第二枚目にこのような整理番号と思われるものが記されているということは、発見当時、この冊は正しい順序で重ねられてあった可能性がある。

裏：「澄神禪く姓郭氏」二〇字

他の頁と同様に複数の文字の輪郭に塗墨がなされている。

第3枚目

表：「太原介く分皇判」二〇字

「長」字の右払いには塗墨が施され、払いそのものがやや短くなつて縮んだ印象を受ける。また「長」字のもつとも上の横画部分の拓紙が切れてしまつていて見えない。

裏：「藩維蔡く郭泰則」二〇字（但し、塗墨された「號」二字も含む）

二行目の「云」字の下と三行目の第一字目はともに「號」字であるが、墨で塗りつぶされた痕跡が見られる。なぜこの二字が塗りつぶされたかといえば、すでに施氏が指摘しているように、初唐の避諱である。つまり、太宗李世民の祖父の名「虎」を避諱したものである。この塗墨の色は拓本の本来の墨色とは違って、深みを感じられない。第四行目「所」と「咨」の間に、四mm幅の小さな拓紙を挿入しているが、その拓紙は無地ではなくクサカムリの一部のような点画が窺える。おそらくこの碑から採取した拓本の一部であるが、どの部位にあたるのかは現段階では不明である。

第4枚目

表：「人倫攸く擅風猷」二〇字

二行目最後「葉」について、翁方綱はこれを「業」と釈しているが、本文では「葉」である。翁方綱の誤記であろう。「荆」字のリットウの下に小さな石花がみられるものの、出版されている書籍の図版は塗墨した結果、逆に平坦な印象を受ける。

裏：「父韶□く秀華宗二〇字（但し、塗墨された「毓」字を含む）
最下段には、六く七mm幅の帯状の拓紙を貼り込んである。

第5枚目

表：「性通幽く聚群分」二〇字

「教」右払い「源」「群」「分」などの周辺の石花にはみな塗墨の痕が見られる。

裏：「或功勞く繫風之」二〇字

二玄社本には「札」字の右横に、その形状が一つは鋭角の三角形、もう一つは半円形の「ニスイ」のような点が見られるが、ロンドンの原本にはこのような痕跡はない。二玄社本は、おそらく拓紙が剥がれて裏返しに折れ曲がった状態で撮影されたものと思われる。その折れ曲がり「ニスイ」のように見えたものである。

この拓紙全体の墨色が黒いだけであまりよくないのは、頁のあちこちに塗墨が施されていることが原因である。なお、最終文字の「之」の右払いにも塗墨の痕がみられる。

以上の考察を参考にしながら敦煌本と王孟揚本との二種を比較してみた。それぞれの文字に対する見解は、比較表内の右側に示した。

三、二種の拓本を比較して

敦煌で発見された化度寺碑、いわゆる敦煌本と原石拓とされる王孟揚旧蔵本（四欧堂本）とを比較した結果、以下の点が指摘できる。

まず王壮弘氏のいう三箇所を具体的に比較したところ、次の点を確認できた。

敦煌本「憑」「粟」「属」三字にはそれぞれ面数に増減があった。

①「憑」のれつか点を四点にするのは、スペースから見て不自然であり、後世の某人に加えられたものとか考えられないため、この指摘だけでは敦煌本が翻刻であるとはいえない。なお、現在の拓は塗墨され三点になっている。

②「粟」の「采」は明らかに一画「ノ」が多い。ただし、現在の敦煌本の拓は塗墨されて「米」に作り替えてある（比較表1参照）。

③「属」は、二種の拓本を並べ「禹」部の口の位置を比較してみると完全に不一致である。拓本の破れ、ヨジレなどという後発的な相違では説明がつかないもので、もともと刻す段階での相違と言わざるを得ない。

二種の「之」は実見したところ、右払いの部分の上下に塗墨したことによって線がシャープになり印象が違ってしまった。

「俗」の旁「谷」は点画の位置関係に明らかにズレが見られる。これは拓紙の破れ、ヨジレとは無関係であろう。

以上の観点を総合すれば、二種に複数の相違が見られるが、採拓の方法や塗墨の分量などから生じる相違ではないため、同一の石から採拓したものとみることが事実上不可能である。

次に、王壮弘氏の指摘以外の相違点を挙げてみよう（比較表2く4参照）。まず【筆画の長短】では「化」の偏旁の位置と「七」の「ノ」部分の交叉の度合いに違いが見られる。「度」の七画目は敦煌本が一画少ない

が、これは塗墨されたものと考えられる。「幽」「軫」のそれぞれの長い縦面の長さに長短の違いが見られる。「更」は敦煌本に、「原」は王孟揚本に、それぞれの字形に歪みが見られる。これは採拓後、拓紙に何らかの変化が生じたという点も否定はできないものの、現段階では判断がつかない。敦煌本の「師」の傍の縦画は頭がほんの少しだが突き出て「市」字になっている。原石拓だとしたら到底理解できない誤刻である。「文」「率」「微」「烈」「地」「擢」は、比較表で指摘したように、それぞれ用筆法に違いが見られる。

このように細部にわたって比較すると、同一の原石から採拓したものとはいがたい相違が多数認められることがより鮮明になった。

王壮弘氏指摘の文字に関する検証
比較表1

*敦煌本と王孟揚本は、点画の細部がわかるように反転した

	敦煌本	王孟揚本	王壮弘の見解	検討事項
憑			王孟揚本は「馬」下 わずかに3点、敦煌 本は1点を多く4点 に刻す。 れっか点 塗墨後の 敦煌本 	敦煌本は、「馬」第4・5画目の横画が長 めで左側の縦画に接近している。れっか点 第4点目はその位置から考えて不自然。後 から誰かによって加えられたものか。現在 は塗墨されている。王孟揚本は「馬」下が 等間隔で3点のみ。「心」第2 画目の収筆は〈九成宮醴泉銘〉 に類す。 
稟			敦煌本は、下半の 「米」字を1画多く 「采」字に刻す。な お、〈皇甫誕碑〉は 「稟嵩山之秀気」の 「稟」の下半を「米」 に作る。	敦煌本は、下半が「米」字では なく、1画多くした「采」字に 作る。王孟揚本は、ナベツタの 下「回」第2画目の転折から縦 画にかけて敦煌本よりやや背勢 気味に作る。  「ノ」塗墨後の 敦煌本
之			敦煌本は、「之」字 の最終画の払いが硬 く削られている。	敦煌本は、「之」字の最終画の払い部分に 塗墨が施されているため、シャープな線に みえる。王孟揚本は、「之」字の第2画目 は第3画目に向かいつつも実 画に作らないが、この用筆法 は〈九成宮醴泉銘〉にも常時 見られるものである。 
			敦煌本は、「之」 字の最終画の払いが 硬くこわばっている。	「之」字最終画の払いは、実際に観察した ところ、上記と同様に塗墨されてしまった ためにシャープな線になっている。
化 度 寺			敦煌本は、「化度 寺」3字の筆画が軟 弱。	敦煌本は、3字とも全体に細身な線で、太 細の変化にやや乏しい。王孟揚本は、「化」 字の第2画目の縦画や旁「し」の跳ね上げ をたっぷりとした肥筆に作る。また「度」 字の最終画をゆっくり開いて肉厚に作る。 さらに「寺」字第3画の起筆部分は細線で かつやや短めである。これは結構のバラ ンスから考えて、摩滅した可能性もある。
俗			敦煌本は、「谷」 部の第4画の撇が短 くなっていて、王孟 揚本と同じでない。	敦煌本は「谷」第2画の位置が第1画目よ りやや右上に打たれているが、王孟揚本は ほぼ同じ高さに打たれている。また「谷」 第3画目に関しては、王孟揚本は起筆部分 が上に突き出ている。王壮弘氏が指摘す るように、「俗」字の点画・結構ともに相違 が見られる。

	敦煌本	王孟揚本	王壯弘の見解	検討事項
氏			第4画目の鈎筆は、王孟揚本には泐痕があるが、敦煌本は一塊り穿たれている。	敦煌本は全体に肉厚に刻すが、王は痩せている。これは摩滅などによって細くなった可能性がある。
號			敦煌本は、2つの「號」字の部分がともに空格になっている、泐痕もない。 *施安昌氏は、「2つの號字の上に確実に塗墨が施されている。墨色は周囲の墨色より濃い。」と指摘する。	「號」は「號」と書いている。王壯弘氏は「敦煌本には泐痕すらない」としているが、実見したところ、文字の上から塗墨していることがわかった。また、拓本を反転してみてもわかるように、「號者」の「號(號)」字は「乎」字の第2画目の点と第4画目の横画の一部が確認でき、また「虎」字の縦画の垂露の先が見える。 「號叔」の「號(號)」字も同様に、うつつらとであるが、「乎」字の横画と「虎」字の縦画の垂露の先端がきわめて微細だが確認できる。 
				
属			王孟揚本は、「属」の旁を「禹」字に作るが、敦煌本はそれに1横画を増加している。	敦煌本は、「禹」字の横画を1画多く作る。両者を比べると、6本の横画のスペースがまったく違って見える。 蒋春臯本の「属」字(右図)は、「尸」と「禹」の「口」部との間隔も横画2本が入るスペースがある。このことから敦煌本は蒋春臯本に類するといえる。 
韶 □ 陵			「韶」下の文字は、王孟揚本は模糊として読み得ない。敦煌本は空格になっているものの、石泐の痕が見られない。 *施安昌氏は敦煌本について、もしこの文字が「博」であるなら、必ずしも塗墨する必要がない。なぜなら「博」なら避諱する必要がないからである。施氏は、直接観察した結果、「號」字の左上辺の3つの点画の一部が確認できたと記す。	敦煌本は、「韶」字の下の文字が塗墨によりまったく判断ができない。王孟揚本は、摩滅により文字が消えているが、「號(號)」字の「乎」第1・2画目の筆画がかすかに窺える。   玉泓館本、蒋春臯本は、ともに「博」に作る。しかし、施安昌氏が述べるように、直接観察した結果、施氏と同様に「博」の点画ではなく、「號(號)」字の点画をかすかに窺えた。 玉泓館本 蒋春臯本
宗			王孟揚本は、下の鈎筆の部分に石泐の痕があるが、敦煌本は欠けており、しかも刻していない。	敦煌本は、「宀」第3画目をややそり上げた状態で抑えてから転折している。文字の左下には塗墨のあとが見られるが、第7画目を刻しているかどうかは不明。

王壯弘氏の指摘以外の文字に関する検証

比較表2【筆画の長短】

	敦煌本	王孟揚本	翻刻その他	検 討 事 項
化			 二種重ね	敦煌本は、偏旁の位置に高低があり、旁「ノ」は縦面に接触するものの、交叉していない。王孟揚本は、偏旁の筆画の高さはほぼ同じで、旁「ノ」は縦画と明らかに交叉している。二種を重ねてみると、その違いが明かである。
度			 玉泓館本	敦煌本は、第7画目の横画の刻が見えないが、これは塗墨された可能性がある。また第8～9画目の用筆に違いがある。最終画の右払いが敦煌本はたっぷり開いているが、王孟揚本はかなり痩せている。摩滅したとも考えられるが、明らかに違いがある。
幽			 玉泓館本	敦煌本は、中心となる縦画をかなり高い位置から引き下ろしているが、王孟揚本は書き出しの位置がやや低めである。玉泓館本は敦煌本と同様に起筆は高い位置にある。
軛			 玉泓館本	敦煌本は、「車」扁の縦画はさほど背勢に作っていないが、王孟揚本の方は背勢が強くみえる。王孟揚本の「車」の中央の縦画はやや短めである。ただし、これは摩滅したためとも考えられる。ちなみに玉泓館本は敦煌本と同様に長く引き下ろしている。

比較表3【字形の相違】

	敦煌本	王孟揚本	翻刻その他	検 討 事 項
更			 蒋春阜本	敦煌本と王孟揚本とは結構が大きく異なる。敦煌本は「日」部分を大きく構え、第1画目の横画に接近。王孟揚本の「日」部分はやや背勢気味に絞り、第1画目から適度な位置取りである。なお、敦煌本の結構は蒋春阜本に近い。
師			 玉泓館本	敦煌本は、旁「巾」の縦画の起筆を横画よりやや上へ出している。王孟揚本は横画に接しているだけである。玉泓館本の「巾」の横画をややそり上げているが、これは王孟揚本に類似している。
原			 玉泓館本	「原」の「日」部分、敦煌本は第3画目は右の縦画に接していないが、王孟揚本は幅が狭い上に接している。拓紙が左に折れ曲がった可能性も考えられる。下部の縦画は、王孟揚本は不自然に左に寄っている。そのためか、最終の点も左寄りやや弱い。

比較表4【用筆法の相違】

	敦煌本	王孟揚本	翻刻その他	
文			 玉泓館本	第1画目の点の打ち方が、敦煌本は強く打ち込んでから下へ引く。王孟揚本は穏やかな用筆で打ち込んでいる。
率			 玉泓館本	右側の2点の打ち方がそれぞれ違う。敦煌本の用筆は、玉泓館本のもものと共通している。最終面の縦面の書き出しの位置に相違が見られる。敦煌本はほぼ中央で、太く引き出す。王孟揚本はやや左寄り細めの線である。
微			 玉泓館本	敦煌本「微」の下部にある縦画「丨」は直線を引いて跳ねているが、王孟揚本のそれはやや左側へ湾曲させている。
烈			 玉泓館本	「列」の左右の偏旁だが、敦煌本はリットウがほんの少し高い位置に配されている。烈火点の4点の形は、敦煌本は紡錘型、王孟揚本は卵型に作る。リットウの第1画目は、敦煌本と王孟揚本の2者はともにやや高い位置に配置し、どちらもほぼ同じ位置だが、玉泓館本はやや低い位置で打たれている。
地			 九成宮醴泉銘	「也」の最終面の払い出しは敦煌本は水平に引きながら右上へゆったり払い出しているが、王孟揚本はしだいに右上へ向かっている。玉泓館本は敦煌本に近い。九成宮醴泉銘にはどちらも類例がある。ただし、左の最終面に塗墨がなされている。
擢			 玉泓館本	傍の上部左側「ヨ」部分の点の打ち方に違いが見られる。ただし、全体の結構はほぼ同じである。

おわりに

以上、王壮弘氏らの先行研究を検証しながら、敦煌本と王孟揚本とを比較し、その違いを指摘してみた。敦煌本は多数の文字に塗墨が施され、これによって字体の印象にかなり違いが生じるのも事実であるが、それだけでは説明のつかない相違も複数指摘された。「王孟揚本は原石拓である」という前提で立論すれば、筆画・字形・用筆法において、敦煌本と王孟揚本とにこれだけの相違が見られる以上は、王壮弘氏の指摘するように「敦煌本は翻刻本である」と言わざるを得ない。

今回は王孟揚本が化度寺碑の原石拓本であることを前提に検討してきたが、次の課題としては王孟揚本そのものが本当に原石からの拓本であるかどうかまで遡って検討する必要があると思われる。これが証明できて初めて真に「敦煌本は翻刻本である」と言うことができるからである。

最後になったが、このたびの海外研究機関訪問にあたり、本学の岩田秀行教授、酒井智宏助教より多大なるご教示やご協力を賜ったことに対して心から御礼申し上げたい。また、本稿は平成二四年度の跡見学園女子大学特別研究助成費給付を受けて研究調査した成果の一部である。ここに記して関係各位に感謝申し上げます。(二〇一三年一月一五日稿)

註

- (1) フランス国立図書館は、近年、市の東南一三区へ移転したが、東洋関係の資料はそのまま旧館に保管されている。
- (2) 王壮弘「歐陽詢《化度寺巖禪師舍利塔銘》」《書法》一九八四年第六期
なお、四欧堂とは呉大澂の子の呉万(湖帆)の齋号である。呉湖帆が四欧堂に珍藏したことから「四欧堂本」と呼ばれる。いわゆる王孟揚旧藏本のこと
で、陳崇本、成親王(詒晋齋)、沈鄭齋、潘祖蔭、呉大澂、呉湖帆へと通伝したもので、現在は上海図書館に収蔵されている。
- (3) 施安昌「観《化度寺巖禪師舍利塔銘》敦煌本補記」《故宮博物院院刊》一九九六年第三期。仲威「海内孤本《化度寺巖禪師舍利塔銘》」《書道研究》一九九八年第六期(「東方早報」二〇一一年一月二日「電子版」に転載)
- (4) 大英図書館へは事前に許可を取り、閲覧室で実際に手にとって細部まで観察することができた。フランス国立図書館へは事前に打診したものの、結局手に取ることは許されず、画像データで補完した。ただし、フランス国立図書館の敦煌本は、二〇〇〇年に訪問した際に実見している。
- (5) 張懷瓘『書斷』巻中の「妙品」中に掲出。
- (6) 趙孟頫(一二五四〜一三二三)は南宋の宗室。文学・美術に通じており、詩・書・画に巧であった。その著に『松雪齋集』がある。王世貞(一五二六〜一五九〇)の『弇州山人稿』とは『弇州山人四部稿』のこと。一七四巻・続稿二〇七巻。金石書画に関する記事がかなり含まれている。
- (7) 元末明初の宋濂は、化度寺碑陳本跋中に、巖禪師塔銘と醴泉銘には翻刻が多いことを述べ、ついで南本は瘦に失し、北本は肥に失し、殊に精絶の本がないと「南瘦北肥」について言及している。
- (8) 中田勇次郎「化度寺の伝承」《書品》四〇号【化度寺碑特集】、一九五三年六月発行)

- (9) 翁方綱『復初齋文集』三五卷。序・記・論・說・書札・贈序・伝・贊・銘・志・祭文・雜考などを収録。
- (10) 『翁方綱題跋手札集録』翁方綱撰、沈津輯（広西師範大学出版社、二〇〇二年）
- (11) 『蘇齋唐碑選』翁方綱撰。唐碑五〇種を挙げ、それに短評を付したもの。
- (12) 中田勇次郎『中田勇次郎著作集』（第三卷）「唐代の碑（欧陽詢 化度寺塔銘）」（二八頁～一〇六頁）の一文中に「I化度寺塔銘の諸本」として載せる。
- (13) 比田井南谷『書道基本名品選』シリーズ中の『書道基本名品集 楷書編2 虞世南孔子廟堂碑／欧陽詢化度寺碑』（一九八五年）の解説に記されている。